

二〇一五年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇一五年 二月二日実施

国語

二次

- 一、問題に答える時間は五十分です。
- 二、問題は、問題一 ～ 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

昔、ヨルダンに旅行したとき、首都のアンマンで妻と二人でタクシーに乗りました。妻は **A** に乗ったのですが、運転手はわたしに **B** に乗れと指示します。

「なぜか？」

と尋ねても、運転手の英語力とわたしの英語力では、さっぱり話が通じません。

あとでヨルダン在住の日本人から教わりました。

「ああ、それは友だち意識ですよ」

わたしと妻がともに後部座席に乗ると、運転手は職業運転手になり、こちらは客になります。そうすると、タクシーに乗っているあいだだけの話ですが、そこに、

① 主人対召使い

といった人間関係が生じる。ヨルダン人はそれを嫌っているのです。そういう関係ではなしに、わたしは友だちの車に乗せてもらっている。そういう意識を持つために、乗客は助手席に坐る。それがヨルダンの仕来たりなんだと説明されました。なかなかいい風習ですね。われわれ貧乏人は、みんな仲間ではないか。友だちなんだ。そういう意識でもって生きてゆこう。ヨルダン人はそう考えているのです。

ところが、わたしがこの話をする、ほとんどの日本人が、

「だって、タクシーの運転手は金をとるんでしょ。金をとりながら、友だちだなんて、 **C**ですよ」

と言います。先日、理髪店の主人から、そういう反応がありました。

「それじゃあ、② わたしが散髪代をあなたに払うよね。あなたはわたしから金を受け取る。そうするとあなたは、わたしの友だちでなくなるわけだ。こちらはあなたに仲間意識を持っていても、あなたはわたしに友だち意識を持たないわけだ。それでもいいと思うのかい……？」

しかし彼は、わたしの言うことに賛同できなかったようです。

どうやら昨今の日本人は、例の、「お客様は神様です」

といった言葉に毒されて、金を払う客にぺこぺこ頭を下げすぎます。客に対して、まるで封建君主と家来の関係であるかのように振る舞います。③もつとも、内心ではぺろりと舌を出しているのでしょうか。

*

昔、といっても半世紀ほどの過去ですが、大阪人にもヨルダン人の言う「友だち意識」がありました。

わたしの家は大阪の下町にあり、商店街のど真ん中にありました。父は戦死をしたもので、母が薬品店を営んでわれわれ四人の子どもを育ててくれました。

現在はどうなっているか知りませんが、昔の大阪では、買い物をしたあと、客のほうに

「おおきに」

とお礼を言って帰ります。もちろん、④お店の人も「ありがとうございます」を言いますが、客のほうも鄭重に礼を言うのです。そういう仕来りがありました。

お店の人が奥に引っ込んで台所仕事をしていることがあります。そういうとき、客は、「ごめん」と大声でお店の人を呼び出します。そして買い物ですませて帰るとき、

「忙しかつたのに、ごめんね」

と、客がお店の人に、呼び出したことを詫びるのです。

わたしは、これが不思議でなりません。商売に関するわたしの観念的な論理では、店主は顧客の来訪に備えて店頭を待機している義務がある。とすれば、店主が奥に引っ込んで店頭にいないのは、いわば職場放棄である。にもかかわらず顧客は、親切にも店主を呼び出してやったのだ。礼を言うべきは店主であって顧客ではない。顧客が詫びる必要はない——となります。そして、昨今の日本人は、ほとんどがそう考えます。

じつは、⑤これが、ちよつと大袈裟な表現ですが、

——資本の論理——

です。平たく言えば、「お金中心主義」です。金を持っている奴が偉い。そして、金を支払ってくれる者には、誰もが頭を下げるべきだ。そういう考えです。いま、日本人は、この「お金中心主義」に毒されているのです。

だが、昔の大阪人は——大阪人ばかりでなく、昔は日本人全体がそうであつたのですが——、そういう「お金中心主義」に毒されていないかつた。昔の人々は、売り手も買い手もみんな同じ人間だ。仲間ではないか。そう考えていたのです。

だつて、たしかに葉屋さんはお店の人で、そこに買い物に来た人は顧客です。しかし、その葉屋さんが向かいの下駄屋さんに買い物に行けば、葉屋さんが顧客で下駄屋さんがお店の人です。下駄屋さんが魚屋さんに買い物に行けば、下駄屋さんが顧客になり魚屋さんがお店の人になります。

役割が順繰りに入れ替わるのです。

ということは、固定的なお店の人もなければ顧客もありません。あるときはお店の人、あるときは顧客です。

そうすると、そこから醸し出されてくる意識は、わたしは、それを、

——お互いさま意識——

と名づければよいと思います。わたしが顧客の立場に立つて、顧客の利益ばかりをまくし立てると、次に自分が商店主の立場に立つたとき、同じく顧客の利益ばかりを主張する人に困らされることになります。だから、お互いに相手を思い遣りながら生きるのです。

この「お互いさま意識」は、「仲間意識」「友だち意識」と同じものです。

貧しい者は、仲間である他の貧しい者を思い遣りながら生きる。それが、貧しい者が幸せになる生き方です。⑥昔の日本人は、みんなそうやって生きてきたのです。

*

このお互いさま意識が、わたしたち庶民の連帯（ソリダリティ）意識につながります。連帯といつても、「万国の労働者よ、団結せよ！」といった、仰々しいものではありません。お互いに他者を思い遣りながら、庇い合つて、助け合つて生きるのが、貧者の連帯です。そういうお互いさま意識があるからこそ、貧しい者は幸せに生きられたのです。

そういう連帯意識のあるところでは、貧乏人が金持ちになりたいなどと思うことは、まさしく「階級的裏切り」になりま

す。金持ちや権力者にぺこぺこし、立身出世をはかっている奴など、唾棄すべき人間であり、われら庶民の風上に置けぬ奴となるのです。

だが、残念ながら、われわれ現代日本人の大半は、その唾棄すべき人間になってしまいました。誰も彼もが貧乏を苦し、貧乏はいやだ、金持ちになりたいと、ぐじぐじ悩んでいます。いくら悩んでも、まあたいていの人は金持ちにはなれません。その結果、ますます貧乏がいやになり、よけいに悩みは深まります。

それが現代人の悲劇です。

どうしてこうなったのでしょうか？

原因はいろいろあるでしょうが、差詰めここではわれわれ現代人が「消費者」になったのが大きな原因だと言っておきましょう。いや、これは、われわれが好き好んで消費者になったのではなく、われわれは資本主義体制の下で消費者にされてしまったと言ったほうが正確でしょう。

われわれが消費者になると、お互いさま意識は消失します。

（わたしは顧客だ）といった意識が前面に出て、そのため相手を見下すようになります。顧客といっても、大した顧客ではありません。零細顧客です。そのくせ、買い物をするときは大きな顔をして威張るのです。

まあ、威張るのはいいでしょう。威張る人間は品性下劣ですが、それはその人の品性の問題だから不問に付します。

しかし、金を使うときに威張る人間は、つまりは金の力で威張っているのですから、ますます威張るためには、ますます金の力を必要とします。でも、われわれはそれほど金を持っていません。そうすると威張れなくなる。その結果、貧乏であることがいやになり、金持ちになりたいと思うのです。でも、金持ちになれない。そうすると、自分が惨めに思えます。悪循環です。

だから、現代日本人は不幸なんです。惨めです。

つまるところ、われわれは消費者になり（消費者にされてしまった）、貧しい者が持つべきお互いさま意識を喪失してしまつた。それが貧しい⑧現代日本人の不幸の原因であります。

（ひろさちや『「貧乏」のすすめ』 角川書店）

問一 本文中の空欄 A・B に入る最も適当な言葉を次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 運転席 イ 助手席 ウ 後部の座席 エ 次のタクシー オ 荷台

問二 本文中の空欄 C に入る最も適当な言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア おぞましい イ 厚かましい ウ 恥ずかしい エ 憎らしい オ 白々しい

問三 ——線部①「主人対召使い」とありますが、次の文の〳〵線 A が「主人」、〳〵線 B が「召使い」の関係になっているものはどれですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア A 父に「お小遣いをあげる」と言われたので、B 私は休日、父と一緒に出掛けた。

イ 道に迷っていた A 母は、B 親切な方に道を教えていただいたので、その方にお礼のお菓子を渡したそうだ。

ウ A 病院の先生に治療してもらったおかげで、B 兄の病気は治った。

エ 遠足の班長になった A 私は、バスの中でのレクリエーションを考えてくるように B 班員である級友に指示した。

オ A 私は先日、駄菓子屋に行き、B 駄菓子屋のおばあさんからお菓子を買った。

問四 ——線部②「わたしが散髪代をあなたに払うよね。あなたはわたしから金を受け取る。そうするとあなたは、わたしの友だちでなくなるわけだ」とありますが、「理髪店の主人」は自分をどのようなものとして意識していることになりませんか。当てはまる言葉を本文中から二字で抜き出して答えなさい。

問五 ——線部③「もつとも、内心ではべろりと舌を出しているのしょうが」とありますが、「内心ではべろりと舌を出している」とはどういうことですか。その説明として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア お金を手に入れられた喜びのあまり、つい気がゆるんでしまうということ。

イ 頭を下げたくらいでお金を払ってくれるような客を、心の中では見下しているということ。

ウ お金さえ得られれば良く、心の中では客のことを軽く見ているということ。

エ ペこぺこ頭を下げて家来のように振る舞うことでも、それほど苦ではないということ。

オ 表面的には相手の立場を持ち上げているが、心の中では不愉快な思いを抱えているということ。

問六 ——線部④「お店の人も『ありがとう』を言いますが、客のほうも郑重に礼を言うのです」とありますが、昔の「大阪人」はなぜ「客のほうも郑重に礼を言」ったのですか。その理由として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 売り手も買い手もお互いにみな、同じ人間だ、仲間ではないかと考えていたから。

イ 自分が商店主の側になった時に、顧客に困らされるのはいやだと考えていたから。

ウ 「お金中心主義」に毒されていない人たちは、金をもらう方が偉いと考えていたから。

エ 商店主に対する思い遣りの心をもっていると、自分も幸せになれると考えていたから。

オ 顧客が自分の利益をまくし立てると、商店主も自分の利益を主張すると考えていたから。

問七 ——線部⑤「これ」が指し示す内容を答えなさい。

問八 ——線部⑥「昔の日本人は、みんなそうやって生きてきたのです」とありますが、「昔の日本人」はなぜ今と違って幸せに生きることができたのですか。その理由として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア お金中心の社会ではなく、みんな助け合つてものを作ろう、分け合おうという社会だったので、お金のことで悩む必要がなかったから。

イ お互いを思い遣る気持ちがあると、庇い合い、助け合つて生きていくことができ、自分一人だけが惨めな思いをすることもなかったから。

ウ みんなが貧しかったため、お互い何を考えているかが分かるので、みんな同じ仲間なのだという気持ちになり、仲間が近くにいる安心感があつたから。

エ 身分がはっきりしていたので、人をだしぬいて偉くなったり金持ちになつたりすることができず、支配階級である武士にさえ頭を下げていればよかつたから。

オ 自分だけ金持ちになり、仲間外れにされるのがいやだったので、貧しい者同士助け合うことで友だちであることを確認し合つていたから。

問九 ——線部⑦「『消費者』」とありますが、これはどのような特徴ちようが見られる人のことですか。その説明として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「お互いさま意識」を持ってなくなり、自分だけが貧乏であることを苦にしてぐじぐじ悩む人。

イ 貧乏であることをいやがり、金持ちになつて威張りながら買い物をしたと思つている人。

ウ 庶民という貧乏な「階級」を裏切り、金持ちになり、何でもお金で買えると信じて疑わない人。

エ 大した買い物もしないのに、自分は顧客であるという意識が前面に出て、大きな顔をして威張る人。

オ 資本主義体制の下で威張つてお金を使おうとしているが、実はそれほどお金を持っていない人。

問十 ——線部⑧「現代日本人の不幸」とは、そもそも何が不幸だといふのですか。説明しなさい。

まわりの人には、不良に絡まれて、カツアゲでもされているかわいそうな親子だと思われたかもしれない。

みやこがテーブルをドンと叩いた。その瞬間、それは思いがけずやってきて、止める間もなく勝手にこぼれ落ちた。あたしは誰にも気付かれぬように「ちよつとトイレ」と慌てて立ち上がり、食堂をあとにした。

トイレに行くまでの廊下を駆ける間、あたしの顔はぐじゃぐじゃだった。涙と鼻水が自分の意思とは関係なく、どんどんどんどん流れてきた。

わからなかった。あたしはどうして泣いているのか、なにが悲しいのか。泣いたらいけないことはわかつているのに、なんで泣いちゃってんだろう、と思いつつ、涙はしばらく止まらなかった。だって、こないだまであんなに元気だったのに。るり姉はいつだって元気じゃなくちゃいけないのに。具合が悪いるり姉なんて、るり姉じゃない。あんなるり姉、はじめて見た……。

食堂では、ヘビとマンガースのにらみ合いが続いていた。どうやらあたしの涙には、誰も気付いていないようだ。トイレで顔を洗ってきたから大丈夫。

「どこ行ってたんだよ」

みやこにすごまれ、思わず妹ごときに「ごめんね、トイレ」と低姿勢になってしまう。お母さんは、疲れきっているように見えた。お母さんに怒るのはお門違いもいいとこだ。

「手術しないとイケないの」

と、お母さんは言った。みのりは、すっかり食べ終わったフルーツパフェの器に、スプーンを入れたり出したりしている。

「手術って、なんなんだよ」

みやこが身を乗り出して、お母さんに食ってかかる。ああ、^②今みやこもきつと泣きたいんだろうな、と思う。

「病気が見つかったの」

みやこが大きく息を吸うのがわかったから、あたしが代わりに「なんの病気」と聞いた。

「お腹にね、悪いものができてたの」

お母さんのはつきりしない物言いにイライラしたけど、みのりがいるからかもしれないと思い、そのままおとなしく聞くことにした。

「よくなるんでしょ？」

あたしがそう聞くと、^③ うつむき加減だったみやこものりもぱつと顔を上げて、お母さんを見た。お母さんはまばたきを二度ずつ三回したあと、すつと顔を上げて、

「よくなるに決まってる」

と言った。

みやこがまた大きく息を吸うのがわかった。空気をいっぱい吸って、全身を使って大声で叫びたいのだ。けれど、みやこはなにも言わなかった。そのまま空気が抜けたようにしぼんでいった。

「大丈夫なんだよね？ 絶対に絶対に大丈夫なんだよね」

あたしは聞いた。お母さんは、

「大丈夫に決まってる。神さまにお願いする」

と、子どものような口調で、^④ 子どものようなことを言った。みのりが「あたしもお願いするよ」と言った。あたしはまた泣きたくなった。けど、今度はこらえた。アイステイを引き寄せて一気に飲んだ。氷が溶けて、すっかりうすくなったアイステイはまずかった。

「もう、るり子、起きてるかもね。行ってみようか」

あたしは、会ってなにを話せばいいのかわからなかった。お母さんの提案に、誰もなにも答えなかった。

「じゃあ、わたしだけで行ってくるわ。あんたたちここにいなさい」

お母さんは笑顔でそう言って、立ち上がった。みのりが慌てたように立ち上がり、「あたしも行く」とお母さんについて行った。

二人の姿が見えなくなってから、

「みやこはここで待ってるの？」

と聞くと、すかさず「そういうお姉ちゃんはどうすんのさ」と返された。あたしは、^⑤ みやこが持ってきた花札を思い出して、切なくなつた。

二人でしばらく沈黙した。それはものすごく長い時間に感じられた。沈黙後、あたしは立ち上がっていた。身体が無意識

にそうしていたのだ。みやこも立ち上がった。あたしたちは、今までぼうつと座ってたのがうそみたいに、競い合うようにるり姉の病室へ向かった。

「やだー、さつきもみやこも来てたの!? なによ、早く来なさいよ。この薄情者め」
るり姉はベッドの上に起き上がっていた。うすい胸元。白くて小さいるり姉の顔。

「元気だった?」

と、呪いたくなるような質問をしたのはこのあたしだ。アホだ。

それでも、律儀なるり姉は、

「うーん。いまいぢかな」

と返事をしてくれた。

UNOで盛り上がったときから二週間しか経ってないのに、るり姉からは「元気のもと」がすうすう抜けていってしまったみたいだ。

「さつきはバイトはじめたんだったね」

少しくらい痩せたって、るり姉の笑顔は変わらなかった。顔中ぜんぶで笑う笑顔。あたしの大好きな顔。

「うん。近くのコンビニ。ほとんどレジ打ちだけだ」

「へえ。さつきの働く姿見たいなあ」

今度絶対来てね、とあたしは言った。

あつ、そうだ。バイト代入ったら、るり姉になにか買ってあげよう。Tシャツとか靴下とか、なにかそんなもの。きつと喜んでくれるはず。

「みやこの頭は、相変わらず汚いわねえ」

るり姉が突然言うから、あたしたちは笑った。本当にみやこの頭は汚いたらありやしないんだから。

言われたみやこは、やっぱり⑥ なんだかうれしそうで、「昨日、海に行ってきたからさ」などと、ぜんぜん関係ないことを言っ頭をかいた。

「ほんとにさ、みやこの髪の毛はまっすぐで、まっすぐで、つやつやでとつてもきれいだっただから。それなのに、そんな腐った赤キャベツみたいにしちゃって、中学生ってほんとばかだよ」

るり姉のいつものセリフ。みやこは下を向いて、いつものようにニヤニヤしている。

「お姉ちゃん、ありがとう。また来て」

女四人で、とりとめもない話をさんざんしたあと、^⑦るり姉は気を遣ったのか、あたしたちが言うより先に言った。お母さんは小さくうなずいた。

「みのり、バレーボール一生懸命練習して、試合でたくさん勝ってね。さつきもバイトがんばって。みやこはとりあえずその頭をどうにかしなさいよ」

るり姉は最後に、またみんなを笑わせてくれた。

「また来るね。早くよくなつてね、るり姉」

あたしたちは交互にそんなことを言っ、病室をあとにした。るり姉はベッドの上で、笑顔で手を振ってくれた。前は外まで見送ってくれたのに、と思つたら、胸がきゅーんとなった。

……中略……

「みやこの髪は、まっすぐでまっすぐで、すごくきれいだっただよ。みやこのつるつるの髪に触るの、好きだったの」

みやこは神妙な顔で、るり姉の話を聞いている。るり姉はただ、自分の気持ちをそのまま言葉にのせているみたいだった。

「みのりのバレーボールやつてるところ見たいなあ」

みのりは元気よく「うん」と答えた。

「さつき、あれ、やつて」

るり姉に言われて、あたしは「え？」とまぬけな声をあげた。

「あれってなに？」

「ほら、あの『キャンプだホイ』の歌。さつき、すごくかわいかったの。あれを見るとすごく元気が出たよ」

ああ、わかった、思い出した、『キャンプだホイ』の歌だ。あたしがまだ小学一年生だった頃に覚えた歌。

あんまり記憶はないんだけど、るり姉の前で、ぴかぴかの小学一年生だったあたしは『キャンプだホイ』を歌いながら、

簡単な振り付けもして披露ひろうしたらしい。そのあとずっと、あたしが高学年になってまでも、るり姉はあたしに「あれ、やって」と『キャンプだホイ』をせがんだ。あたしがしかたなくやってあげると、るり姉は一緒に歌い出し、でも結局最後は、るり姉が一人で歌って踊おどって満足するのだった。

何年かぶりのリクエスト。すっかり忘れてた。あたしが中学生になってからは、たぶん一度も言われなかった。るり姉なりにあたしを大人扱いしてくれてたのかな、と今さらながらに思った。

「あたしもそれ知ってるよ」

みのりが言って、さわりを歌った。

「山中湖にドライブに行ったの覚えてる？ さつきはまだ小学一年生で、学校で習ってきた『キャンプだホイ』の歌を、車のなかで一先懸命振り付けして歌ってくれたの。とつてもかわいかった。涙が出るくらいかわいくて、あたし、すぐうれしかったんだよ」

るり姉は、そのときのことを思い出しているような遠い目をしていた。

みやこが「お姉ちゃん、歌ってよ」と小声であたしをつつく。もちろん、あたしだって、今ここで大きな声で歌えたいと思う。だけど、そんなことできない。だって高校一年生だよ。しかもこんなところで、二人の妹が見てる前でできるわけがない。

みのりが小さな声で『キャンプだホイ』を口ずさんだ。るり姉は目をつぶって、

「……なつかしいな」

と、つぶやいた。そして、そのまま眠ねむってしまった。みのは「るり姉、寝ねちゃったの？」と不思議そうな顔をしてたけど、あたしとみやこは、ちよつと疲れさせすぎたと思って、反省した。

「お姉ちゃん、なんで『キャンプだホイ』やってあげないのよ。るり姉は、お姉ちゃんの『キャンプだホイ』が聞きたかったんだよ。ケチだね。なに気取ってるのよ。サイテー」

病室を出てからみやこに嫌味いやみたらしく言われて、カチンときた。

「あんただって、その頭どうにかしなさいよ。みやこの昔の、つるつるの髪の毛触りたいって、るり姉言ってたじゃない」
あたしたちは二人で鼻息を荒あらくして、そして、お互いになんとなく心に思うことがあった。

……中略……

「すごい！ 見て見て、今のハート型だよ。あつ、今度は星だよ！」

みのりがはしゃいでいる。あたしもみやこもところどころ歓声をあげた。

病院の屋上から見る夜空はとても広くて、花火はここから見える大きな空の、十分の一くらいを使っているだけだった。

眼下には、るり姉の住んでいる町が広がっている。たくさんさんの家の明かりが見える。数え切れないほどの家があって、そのひとつひとつに誰かが住んでいるんだと思うと、なんだかこわいような、それでいて安心するようなへんな感じだった。

あたしは『キャンプだホイ』を何気なく口ずさんでいた。声に出してみたら、思いがけずたのしくて、うろ覚えの振り付けまでやってみることにした。⑧隣にいるみやこが驚いたような顔であたしを見て、それから二人で折りたたみ椅子に座ったまま、歌った。

みのりが「あたしも」と言って参加して、三人で歌った。お母さんも参加した。おばあちゃんも笑いながら一緒に歌った。小さい頃に、あたしたちとるり姉がいつも歌ってたから、おばあちゃんも覚えてるんだ。

色とりどりの花火を見ながら、あたしたちは愉快的な気持ちになって『キャンプだホイ』を歌った。三番まで繰り返して何度も歌った。ぜんぜん飽きなかった。るり姉も一緒に口を動かしていた。

何度もしつこく繰り返してたら、そのうち*カイカイも歌いだして、おおげさな振りまでつけて動きまわるから、あたしたちはおもしろくて、涙を流して笑った。

キャンプだホイ キャンプだホイ キャンプだ
ホイホイホイ

キャンプだホイ キャンプだホイ キャンプだ
ホイホイホイ

はじめて見る山 はじめて見る川 はじめて泳ぐ海

今日から友だち 明日も友だち ずっと友だちさ

キャンプだホイ キャンプだホイ キャンプだ
ホイホイホイ

キャンプだホイ キャンプだホイ キャンプだ
ホイホイホイ

はじめて見る鳥 はじめて見る虫 はじめて遊ぶ森
今日から友だち 明日も友だち ずっと友だちさ

キャンプだホイ キャンプだホイ キャンプだ ホイホイホイ
キャンプだホイ キャンプだホイ キャンプだ ホイホイホイ
はじめてあう人 はじめてうたう歌 はじめてつくるごはん
今日から友だち 明日も友だち ずっと友だちさ

はたから見たらばかみたいに飽きることなく、何べんも繰り返して合唱した。こうしてずっと歌ってたら、るり姉の病気が治るような気がして、心をこめて歌った。きつとみんなもそうだったと思う。歌えば歌うほど、『キャンプだホイ』が、るり姉の悪い病気を吸い取ってくれて、それが花火になって、パツと散っていく気がした。

るり姉は夜空を見ながら聞いていた。あたしの小学一年生の頃を知っているるり姉。山中湖へ行く、車のなかのあたしを思い出しているのかな。

るり姉。絶対、治るよ。絶対治るからね。どうか、どうか神さま、仏さま。おじいちゃん、E.T.さま、花火さん、キャンプだホイの歌さん。るり姉の病気を早く治してください。お願いします。
天に近いせいか、願いがちゃんと届いたような、そんな気がした。

盛大な花火がいくつも重なって打ち上げられ、最後は、柳やなぎみたいな天の川みたいな、金色の糸がさらさら流れるみたいな花火で終わりだった。あたしたちはみんなで大きな拍手はくをした。

「ああ、たのしかった。みんなどうもありがとう」

るり姉の大きな目には涙がたまって、きらきらしていた。もちろん、あたしは泣きたいのを我慢まんした。
「さつき、キャンプの歌、ありがとね」

たのしかったね、とあたしはるり姉の手を握にぎった。

「るり姉」

みやこが声をかけて、るり姉はみやこの目を見つめた。

「^⑨あたしは、髪を毛黒くしてストパーかけるから」

あたしはびっくりして、みやこを見る。るり姉は唇の端を少しだけ持ち上げて笑って、腐った赤キャベツ、と小さな声で言った。

「たのしみにしててね」

と、みやこが真顔で言う。るり姉はうれしそうにうなずいた。

カイカイもおばあちゃんも泣き笑いみたいな顔をしていて、あたしまでまたやばくなつたから、重力に逆らうように顔を夜空に向けた。そしたら、みやこも真似して、みのりも同じようにした。つられるように、カイカイもお母さんもおばあちゃんも夜空を見上げた。まるで、みんなで祈りを捧げているみたいだった。

ぼんやりといくつかの星が見えた。あたしは大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出した。大丈夫。みんなの祈りは、絶対届くはず。だって、るり姉だもん。るり姉だよ。願いは叶うよ。大丈夫に決まってる。

みのりが『キャンプだホイ』をまた歌いだした。こうしている間にも、時間が目の前を通り過ぎてゆくのが不思議だった。

(椰月美智子『るり姉』 双葉文庫)

〈注〉カイカイ……るり姉の夫のあだ名。

問一——線部①「なんで言わなかったわけ？」とありますが、この時、「みやこ」はなぜお母さんに腹を立てているのですか。その理由として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「るり姉」の入院が病気のためだと知っていたら海水浴になど行かず、もっと見舞いに来られたと残念に思ったから。
イ 大好きな「るり姉」がどうやら重い病気であるのに、自分達を軽く見て教えてくれなかった母に不満を感じたから。

ウ 家族の一員とも言える「るり姉」の病気のことを、忙しさで言い忘れていた母のうかつさが許せなかったから。

エ 家族であれば当然すぐに話すべき重要なことを自分達に話さなかった母との信頼関係が失われたと感じたから。

オ 自分は遠慮して飲み物を注文しなかったのに、それを真に受けてもう一度聞いてくれなかった母が不愉快だったから。

問二——線部②「今みやこもきつと泣きたいんだらうな」とありますが、「あたし」は「みやこ」をどのように見ているのですか。その説明として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア お母さんにおける姉の病状を説明されても分からず、そのことが腹立たしくてしかたないのだからということ。

イ るり姉の状況をちゃんと説明してくれなかった母に対する怒りは、泣きたいほど激しいのだからということ。

ウ 自分のことを信頼してくれない母に怒って見せてはいても、それが悲しく、悔しいことなのだからということ。

エ お母さんに食ってかかっているが、それはるり姉に対する泣きたいほどの心配の裏返しなのだからということ。

オ 手術という最後とも感じられる手段を使わなければならないことが、怖くてしかたないのだからということ。

問三——線部③「うつむき加減だったみやこもみのりもぱつと顔を上げて」とありますが、この時の二人はどのような期待をして顔を上げたのですか。その説明として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「るり姉」が病気であると言われてひどくショックを受けたが、実はそれが母の冗談であると期待した。

イ 「るり姉」の病気が良くなるのであれば、たびたび病院に見舞いに来る必要がなくなると期待した。

ウ 「るり姉」が重い病気であると知って落ち込んでいたが、実はその病気が治るものであると期待した。

エ 今日「るり姉」についての暗い話題ばかり聞いてきたが、少しは明るい話が聞けるかもしれないと期待した。

オ もはや「るり姉」の病気が治ることはない諦めていたが、わずかでも治る可能性があるのかと期待した。

問四 ——線部④「子どものようなことを言った」とありますが、お母さんの言葉のどのようなところが「子どものような」のですか。説明しなさい。

問五 ——線部⑤「みやこが持ってきた花札を思い出して、切なくなつた」とありますが、それはなぜですか。その理由として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 二週間前のように、元気なるり姉と一緒にみんなで遊ぼうと持ってきた花札で遊べそうもないことに、るり姉の病状の悪さを思い知つたから。

イ 一緒に花札をすることで日頃あまり仲の良くないみやここと親しくできると思ったのに、結局自分達の仲の悪さを実感することになつたから。

ウ せっかくみやこが花札を持ってきてみんなで楽しめると思っていたのに、家族で仲違いなごのようになってしまったことがつらかつたから。

エ 今からでもみやこが持ってきた花札をみんなでやりたいのに、この雰ふ囲気ではみやこに言い出すことができず、できそうにないことが残念だつたから。

オ このままここにいたらみやこがわざわざ持ってきた花札がむだになるが、一緒に病室に行こうとも言い出せず、どうしていいか分からなかつたから。

問六 ——線部⑥「なんだかうれしそう」とありますが、なぜ「汚い」と言われているのに「うれしそう」なのですか。その理由として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 自分以外の姉妹のことばかり気にしていると思つていた「るり姉」が、自分のことも思つてくれていると感じたから。

イ 「るり姉」が自分のことをけなしているのではなく、むしろ自分のことを気にかけてくれていると感じたから。

ウ 病気で弱つて見える「るり姉」であつたが、それでもみんなを笑わせるくらい元気が残つていることを感じたから。

エ 「るり姉」が、自分の髪が海でいたんだという小さな違いにさえ気付く程、自分をよく見てくれていると感じたから。

オ 「るり姉」のことばで、「るり姉」を喜ばせるために髪をきれいにしようと思つた気持ちきもちが伝わつたと感じたから。

問七 ——線部⑦「るり姉は気を遣ったのか、あたしたちが言うより先に言った」とありますが、「るり姉」が「気を遣つて」あたしたちが言うより先に「また来て」と言ったのはなぜですか。説明しなさい。

問八 ——線部⑧「隣にいるみやこが驚いたような顔であたしを見て」とありますが、「みやこ」はなぜ「驚いたような顔」をしたのですか。その理由として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア さつきが「るり姉」の前で『キャンプだホイ』を歌ったら自分も一緒に歌おうと思っていたが、振り付けまでしたのでどうしていいか分からず、焦^{あせ}ったから。

イ 「るり姉」のためにさつきが『キャンプだホイ』を歌ったとしても、それはいやいやだろうと思っていたのに、実際には楽しそうで意外だったから。

ウ キャンプではなく花火だというのに、いきなり『キャンプだホイ』を歌い始めた、その場の雰囲気^{きふう}をわきまえないさつきに、少しあきれたから。

エ 先日病室では、人に見られるのを気にして『キャンプだホイ』を歌うことができなかつたさつきが、歌うだけではなく振り付けまでしてみせたから。

オ 高校一年生にもなる姉の「さつき」が、家族以外はいない屋上とはいえ、『キャンプだホイ』を恥^はずかしげもなく歌い、おおげさな振り付けまでしたから。

問九 ——線部⑨「あたしさ、髪の毛黒くしてストパーかけるから」とありますが、「みやこ」はなぜ髪を黒く、真つ直ぐにしようと思ったのですか。その理由として、最も適当なものを次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

ア さつきがあれだけ嫌がっていた『キャンプだホイ』を歌って「るり姉」に喜ばれているのを見て、自分もさつき以上に「るり姉」を喜ばせたいのだという気持ちを、今のうちに伝えておかなければならないと考えたから。

イ さつきが「るり姉」を喜ばせるために本当はやりたくもない『キャンプだホイ』をやったのを見て、自分も「るり姉」の嫌がっている髪をやめて「るり姉」に嫌がられないようにしようと考えたから。

ウ さつきがやった『キャンプだホイ』を喜んでみせることで、「るり姉」が自分にも何かして欲しいと伝えようとしていると感じ、それならば「腐った赤キャベツ」をやめることでその気持ちに答えようと考えたから。

エ さつきが恥ずかしい気持ちをおさえて『キャンプだホイ』を歌い、みんなもそれに合わせて歌ったことで強い印象を残したと感じたので、敢^あえて自分の嫌な髪にすると宣言して、さつきに負けない印象を残したいと考えたから。

オ さつきが、恥ずかしくて嫌がっていた『キャンプだホイ』を歌って「るり姉」を励^{はげ}ましたのを見て、本当は変えたくはないのだけれど、「るり姉」の望むような髪にして「るり姉」を喜ばせようと考えたから。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 犬も歩けばボウに当たる。
- ② 行事の準備のためにソッセンして行動する。
- ③ 有名な文学作品のロウドク会が行われた。
- ④ 日本列島を台風がジュウダンする。
- ⑤ 今日のお昼はフンパツして、レストランでランチを食べよう。
- ⑥ 易者に手相を占ってもらおう。
- ⑦ 大聖堂の厳かな雰囲気に圧倒される。
- ⑧ 一時間にわたる熟考の末、正解にたどりついた。
- ⑨ 長い年月をかけて、彼との信頼関係を構築した。
- ⑩ 均整の取れた体型をしたアスリート。

問題四

次の①～⑩の言葉に続けるのに最もふさわしい文を下のア～コから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|--------|---|--|
| ① | さっぱり | ア | 来ないのか。 |
| ② | かならずしも | イ | たのんでもだめだろう。 |
| ③ | たぶん | ウ | こちらへおいでください。 |
| ④ | なぜ | エ | 最後までやりとげたい。 |
| ⑤ | なんとかして | オ | わけがわからない。 |
| ⑥ | きつと | カ | 来るとはかぎらない。 |
| ⑦ | けっして | キ | 彼の <small>かれ</small> したことに <small>ちが</small> いがない。 |
| ⑧ | どうぞ | ク | 途 <small>と</small> 中でやめない。 |
| ⑨ | たつた | ケ | 天使 <small>てんし</small> みたいだ。 |
| ⑩ | まるで | コ | 一度だけ会った人だ。 |

問題五

漢字には、幾つもの漢字、または、「火」↓「灬」のように、その漢字を変形した「部品」を組み合わせて作られたものがあります。次に挙げる漢字、またはその漢字を変形した「部品」を三つ組み合わせることができる漢字を、例にならって五つ答えなさい。

【例】 「手」 + 「土」 + 「寸」 ↓ (答) 「持」

水	木	言	米	糸	音	身	重
貝	刀	月	刃	士	女	頁	力
寸	心	九	又	大	人	古	口

(以下余白)